
遥かな空

木野目理兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遙かな空

【Nコード】
N8360G

【作者名】
木野目理兵衛

【あらすじ】
祖母の元を訪れた孫とある黄昏の時

三枝悠が泣きながら祖母、和羽の元を訪れたのは、日の暮れかけた黄昏時であり、郊外に建てられた古びた一軒家のテラスは紅と黄と橙と金の入り混じった色に染められていて、そこに置かれている安楽椅子の上で柔らかく身を揺らしつつ優しい微笑みを浮かべている和羽の顔も、彼女の足元に身を委ねて喉をしゃくっている、日に焼けた肌を涙で腫らした悠の顔も、一樣に同じ、黄褐色で塗られていた。

「それで結局、あんたはどうしてあたしの所に来たんだい？　泣きながらさ」

和羽は、そんな夕日の輝きに細い瞳を更に細くさせながら、悠の短く切り揃えられた黒髪をそつと梳く様に撫でて行く。自宅からここまで走って来た為だろう、髪は汗ばみ、老女の手にか絡み付いて来たが、元が柔らかい為、直ぐに留まる事無く流れ始める。

ただ悠の口はそうとも行かず、ぴっちり閉じられたままに何も語ってくれはしない。

「弱ったねえ。お婆ちゃん、エスパーじゃないんだから、言ってくれないと良く解らんよ」

その様子に和羽はやれやれと首を横に振ってから、視線を悠から空へと向けた。

そこは悠の名の由来となったもので、名付けたのは和羽自身。自らの波乱に満ちた、と誰もが思える程度の半生を思い返し、幾分か苦味を込めた笑みと共に妻へ母親を紹介した息子の事を思い出し、それでも尚、自分の意見を通そうとする我の強さに辟易しつつも、孫にはそう無く育って欲しい、否、きつと育てるのだと誓って、付けた名である。その色合いを変えながら何時如何なる時であれ……：そうだ、それは正に言葉通りに……何一つ変わる事無く彼女を見下ろし、そうして彼女が見上げて来たあの空の様な、遥かなる心を持

つ子へと。尤も、親の心子知らずといふべきか、或いは血筋といふべきか、その様には全くならずに今に到っているのは、祖母として恥ずかしい限りであったのだが。

和羽はくつと唇を吊り上げた。本当に誰に似た者か、と答えが明白な疑問を頭に浮かべながら、手は悠の髪に、眼は空の上に向け続ける。

昼の青さを殆ど下に押し遣って、天の幕を紅く染め上げている夕の光。だがそれも束の間の事だ。やがて地平線の下から浮かび上がる夜の黒さに狭間の紫へと妥協せざるを得なくなつて、最後には月と星々と人々の為に場を譲らなくてはならない。そういう理だ。

「大輔……」

そして漸く悠が、ここに来て始めての言葉を発したのも、丁度その狭間の頃合で、

「大輔……」

「誰だい、そりゃ」

「……僕の友達……何時もサッカーして遊んで……でも、もう駄目だつて……」

それは俯いたままに、ぽつりぽつりと呟かれる断片的なもので、和羽の老いた耳にとっては酷く聞き取り難いものだったが、だが意味は良く理解出来た。良く、とても良く。

「……あいつ、きつと僕が羨ましいんだ……僕の方がパスもシュートも上手いからさ……それで僕ともうサッカーしないって……ずるいや、そんなの……」

「嗚呼、そうだろうね。でも、それじゃ半分だ」

だから和羽はもう途中で悠の言葉を遮ると、空から孫の方へ視線を下ろした。

「え……」

それに驚き悠が顔を上げれば、紅い光に影が差す老女の何とも渋い笑顔があり、

「うん、確かにね、理由としてはそれもあるだろうさ。だが半分だ。

それだけじゃない」

「それじゃ何……もう、半分は？　もう半分は何なの……」

「そうだねえ……優しさ、って答えじゃ駄目かい？」

「何だよ、それ……真面目に応えてよお婆ちゃん……」

そんな葉じゃないんだから、と、悠が泣き腫らした顔を顰めれば、その笑みはますます渋味と苦味を増させるばかりで、それ以上言葉を紡ごうとはしない。

和羽は悠との血の結び付きをこれまで以上に感じながら、それこそ実の子よりも子らしく感じながら、故にこそ、何と答えてあげるべきか悩んでいた。それは喜ばしい悩みであるが、しかし悩みである事に変わりはない。答えは必要だ。で、無ければ孫は納得しまい。

「いやあ……ある意味、正解なんだがねえ」

本当に、何と答えたら良いだろう。和羽はそう小さく呟きながら思考を巡らす。自分の幼い頃、あの六十年以上前の頃でだって、彼女の気質は変化しなかったのだ。今の時代になればそれは尚更で、寧ろその大輔という子の方がちょっと珍しいのかもしれない。時代錯誤の堅物。名前に相応しいといえば相応しくて微笑ましい。まるで死んだ爺さんの様。あの人も相当にお堅い人だった、と、和羽は我知らず喉を立てて笑い、それを訝しそうに見つめる悠の眼と彼女の眼が重なり、そこで和羽は言うべき言葉を思い付いた。

もう、とうに狭間を越えた空が夜の薄影を、変わりに星と月の光を投げ掛け始め、二人の人間の顔や体の輪郭を浮かび上がらせている中、彼女は囁く様に言った。

「まあ、そうさね。きつと多分、直に解ってくるだろうさ」

悠は彼女の言葉に一瞬きよんと眼を丸くさせた後、勢い良く身を起こして、

「ちよっとお婆ちゃん、それさつきよりも訳解んないんだけど」
けれど和羽は微笑むばかりに、その幾分くすんだ歯の白さだけが目立っている。

しかしそれは確かな答えだった。少なくとも彼女の中では。散々

悩んで出したものとしては実にお粗末だが、そうとしか言えない。
何せ自分がそうだったのだから。自分も、長い間、解らなかつたとい
うのにまるで生き写しの様な孫に解れというのも無理な話で、
「今はそうだ。でも、直に、直ぐに解る。解らざるを得なくなるよ
……え、悠ちゃん？」

そんな自身の少女時代と照らし合わせながら微笑む和羽に、悠は
むつつりと、そう呼ば
れるのは心外だと言わんばかりに視線を背けた。小麦色の頬をそっ
と紅くさせて。

そうして空は全くの夜で、彼女達の頭上には月が眩いばかりの光
を放っているのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8360g/>

遙かな空

2010年10月8日15時05分発行